和歌山大学教育学部・和歌山県教育委員会連携協議会10周年を祝う

8月1日学長に就任いたしました山本健慈です。これから4年間和歌山大学長を務めます。どうぞよろしくお願いいたします。

さて本日の和歌山大学教育学部・和歌山県教育委員会連携協議会10周年を迎えましたことについて大きな喜びを感じております。また連携協議会の設置にかかわられた教育学部歴代学部長はじめ教員、職員のみなさん、また教育委員会の歴代教育長およびスタッフのみなさんに深く感謝申し上げます。10年間の歴史を積み重ねておりますので、すでにリタイアされた方々もおられます。とくに、資料でふれられております小関前教育長、池際前学部長、亡くなられました橘元学部長のご努力やリタイアされた方々にも深い感謝をささげたいと思います。

連携協議会の発足および活動の経過、その評価にかかわりましては、すでに歴代学部長および小関前教育長、山口教育長が詳しく書かれておりますので、重複するところはさけまして、約30年余和歌山大学および和歌山県の教育にかかわってまいりました経験から少しお話をしたいと思います。

私は1977年和歌山大学教育学部に社会教育という学科目が新設されるに伴って赴任いたしました。赴任直後和歌山県教育委員会社会教育課の課長さん以下6，7人の来訪をうけまして、すぐにお付き合いがはじまりました。しばらくして教職員団体、いわゆる組合の教育研究集会などとのお付き合いもはじまりました。当時はまだ1950年代から60年代なかばの勤務評定闘争や学力テスト反対闘争とその処分の余韻が色濃く残る時代でありました。したがって教育委員会、大学、組合の間の関係は緊張もあったわけではありますが、それ以上に私の印象深いことは、立場の異なる人々（教育委員会幹部、教職員組合幹部）の間に敬意と尊敬があることでありました。しばしば友情の交歓もあったと思います。私自身は、この関係について研究テーマとしても意識しておりましたが、今日まで果たせておりませんし、今後もできそうにありませんが、ぜひ次代に若い研究者に関心をもってもらいたいと、またこの連携協議会に至る過程そのものが研究に値することだと思っております。

もちろんすべて調和的にすすんだわけではありません。私自身も、おそらく緊張的側面に巻き込まれたのでしょう、和歌山県教育委員会との関係が疎遠となった時期もあり

ました。しかし数年経て小関前教育長も書かれておりますが、当時生涯学習担当でありました教育次長時代の小関さんたちと再会、共同の和歌山大学生涯学習教育研究センターの設立準備過程を経て、組織としての和歌山大学と和歌山県教育委員会の関係が成熟してきたと思います。この間私自身、組織としての連携を支える個人としての信頼の関係について、教育委員会幹部とずいぶんつめた、そしてきびしい議論をした覚えがあります。その過程で今日の連携のもととなる構想について、この時にはすでに教育長になっておられました小関さんと議論を重ねもいたしました。

さてこうした関係、連携は、多くの方がふれておられますが、長年の個人同士の重層的で、そしてさまざまにクロスする人間関係のうえにつくられたということであります。今日ここには、私より若い世代の大学、教委、教員の方々がほとんどです。ぜひ皆様方には組織を背負った関係ではなく、さまざまな出会いの場面を通じて個人としての自己紹介を積み重ね、そして相互の敬意が生み出すことの重要な意味を継承していただきたいと切に願っております。

実は講師を引き受けていただきました惣脇さんと私の出会いも、日本社会教育学会副会長と文科省生涯学習総括官という関係の出会いでありました。松浦学部長から講師の相談を受けましたときに、すぐに惣脇さんを思い浮かべたわけでございます。

いま歴史的な政権交代が行われ、私からすれば市民も官僚も、そして政治家も、そしてアカデミズムもジャーナリズムも「政治学習」を行っているように思われます。その意味では和歌山県の場合、大学（アカデミズム）と教育委員会（官僚）は先駆的な学習を積み重ね、すでに連携のシステムを動かしていると言えます。

私は、学長といたしまして、このシステムが継続発展するように助力いたしますとともに、全国各地にもこのシステムが広がるよう尽力することを誓いまして、ご挨拶にかえさせていただきます。

平成２１年１０月２４日

国立大学法人和歌山大学
学長　山　本　健　慈